阿部知二全集

第3巻

阿部知二全集

第3巻

河出書房新社

阿部知二全集　第3巻

一九七四年十一月十日　初版印刷
一九七四年十一月十五日　初版発行

著　者　阿部知二
装　画　平塚運一

発行者　中島隆之
発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
電話(〇三)二九二一三七一一
振替東京一〇八〇二

印刷　暁印刷株式会社
製本　中西製本印刷株式会社
定価は函・帯に表示してあります

目次

風雪 5
草原の午後 165
湖畔にて 173
地図 192
荒地 205
幻影 226
老馬行 234
王家の鏡 257
野の人 271
春の日 298
解題 福田久賀男 309
解説 平野謙 318

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

阿部知二全集　第3巻

風

雪

この作品は、既存あるひは現存の、如何なる人物にも関りなく、又、文中のS大学も、全く空想のものであることを記して置く。

一　章

馬橋為吉の汽車が軽井沢の駅についたときには、途中から降り出してゐた雨は、ざんざ降りになつてしぶいてゐた。偶然土曜日であつたので、駅の内外は、混みあつてざはめいてゐた。週末にかけつけてきたといふ恰好の夫か愛人かを、歩廊で甲高い声でさがしてゐる外人の女、わけもなく盛装してあるきまはつてゐる日本の女、ホテルの客引、女友達の鞄を奪つて改札口の外の自動車に案内してゐる青年、改札口の外の雨の中を自転車で右往左往してゐる内外人の子供たち、――さういふ混雑がひとしきり静まる頃、汽車は、また、雨に濡れ風にそよいでゐる落葉松の林と、もはや秋草の花をまじへた草原とのなかに出てゆく。為吉は、うすい白服のうへに、雨外套をつけて、次の沓掛の駅におりる用意をする。四方の山々も見えぬほど雨に煙つてゐる歩廊に降りると、夕方の山地のしめつぽく冷えきつた空気が、体にしみわたつてきて、一二度軽いくさみをした。この駅でも、避暑客とその家族たちの出迎へなどがあつて、すこしばかり混みあつたが、それを分けて外に出て、叔父の泊つてゐる温泉場行きの乗合自動車に乗つた。

――永の御患ひの後の志学先生にひさびさに御眼にかかつて御快癒のお慶び申上げ、かつは満七十歳の御誕辰のお寿ぎ申上ぐるために、御静養中の山荘にお伺ひするが、信越線列車にて直接に同地に赴き、この度は東京には出てゆかぬ故、お前が、当日出向いて来るよう、と故郷の北陸の叔父からの手紙がきたのは、昨日のことであつた。

幼いときに父をうしなつてから、ほとんど親代りになつてくれた叔父の言葉であつてみれば、久しぶりに逢はうといはれれば出てゆくのが当然でもあり、また、その叔父のすすめで志学氏の伝記を書くと年来約束してゐるのだから、時に志学氏を訪問してその謦咳に接しなければならぬ、といふことにもいはば義務のやうなものを感じた。それに、残暑の候のそのころの東京の街は、まつたく蒸し暑く、毎日のやうにどんよりと空気がこもつて、息苦しいほどだつた。為吉は、その叔父の手紙を見ると、むしろ心よろこんで出て来ようとしたのだつた。しかし、どのやうな小さな旅にも、その出立ちには多少の心の引掛りともいふものは伴ふ。――為吉は、母と妻との、昨日の対話のことを、雨の中の坂路をゆれて走つてゐる車のなかで想ひ起した。

昨日、叔父の手紙をみると、二階からおりて、茶の間で為吉の子供のために編物をしてゐた母に「あす、叔父さんにあひに、それから志学先生にお目にかかりに、山に行きますよ」といふと、母は「さうかね」と浮かぬ返事をした。

「なにか、ことづけでもありますか。それとも、一つ思ひ切つて、一緒に行つてみませんか」と、母をさそつた。
「いいや」母ははつきり答へた。それから老眼鏡ごしに為吉をながめながら、「どうして、喜之進さんは出てきたのだらう」といぶかるやうにいつた。
「志学先生の御見舞、それから、誕生日のお祝ひださうですよ」
「田舎でも忙しいのだらうに、御苦労なこつた」母はさう呟くと、だまつて、その粗い目の、恐らく為吉の妻は有難迷惑とも思つてゐるにちがひないやうな不細工な、孫のための編物をつづけた。
母の「御苦労」といふ言葉の奥には、義弟の喜之進が、今もなほ志学氏のやうな老政客の崇拝者としての熱を、冷ましてもゐないことへの皮肉もこもつてゐたのであらうし、また、息子の為吉がその掛りあひになつて何かといへば引張り出されることへの不満もひそんでゐたのであらう。為吉の父は、多少の門閥と田畑を持つた家に生れたが、明治の一時期を風靡した政治熱に、年少の時からとらへられてしまつて、家業も顧みないで、その草深い北国の地を、演説し運動して飛び廻つたといふことだつた。おそらく、機会さへあれば中央にも乗り出さうと思つてゐたのであらう。周囲のものが心配して、その熱もさめるかと、早く結婚させてしまつたのだが、それはとどまるものでなく、それに比例して家産は見る影もなく減つて行つた。しかも、彼は平然として改めなかつた。それはすべて、当時、民権派の少壮論客として名声があつた志学氏が、土地の新聞社に聘せられてきたことから始つてゐた。志学氏がそこから代議士として国会に送られ、ながくその土地を地盤として「理想的選挙」を誇りながら、政界にその足跡を残したのも、為吉の父を中心とする一群の田舎青年の献身にその源を発する。あらゆる迫害や窮乏も、彼等の「自由民権」の夢をゆるがすことが出来なかつたのだ。そして、おそらく、その波に乗つて、父もなにほどかの仕事をすることも出来たはずではあつたが、間もなく、為吉が生れる前後から、胸の病気に冒されて活動の自由をうばはれてしまつた。なかば病床にありながら、それでも、地方新聞に激しい議論文をのせたり、人を集めて画策したりしてゐたのだが、為吉がまだ幼い頃に、亡くなつてしまつた。——母は、この、家業を忘れて飛びまはる夫に、名ばかりの妻としてさびしく何年か仕へ、その後は、永い寡婦暮しをつづけて、為吉を育てゆかなければならなかつた。
父が亡くなつたことは、あるひは、馬橋の一家に取つてみれば、よいことであつたかも知れぬ。弟の喜之進は、兄とはちがつて実直で勤勉な男であり、その時にも、まだい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

くらかは回復の余地はあるほどに残されてゐた田畑山林を守つて、懸命に仕事にいそしんだ。彼が分け与へられたものは、その努力によつて、何十年のあひだに、はじめよりははるかに大きな確実な家産となつて、今日に至つてゐるし、数人の子女も、確実安全な道にそれぞれつけることに成功した。また、為吉の母子にわづか残されたものも、誠実に、自分のことのやうに心にかけて差配してくれて、為吉が教育を受けることには事を欠かさなかつた。このことを、為吉の母にしても、どれほどに感謝してゐるかわからぬ。しかし、その喜之進にも、兄と同じ「血」がやはりあつたといふのであらうか、それとも、少年期に受けた兄たちの言論の感化が、いつしか抜きがたくその精神に浸みこんでしまつてゐた、といふのであらうか、彼とても、まつたく政治から絶縁して生きたのではない。ただ、兄やその周囲の人々に、同じやうないくつかの例を見たことのために、よほどの自制力が加はつて、自分の家業に傷をつけぬ範囲内で、その政治熱情を発散させる、といふ、なかなか分別のあるやり方を、一生つづけてきたのに過ぎないのであつた。しかも、若い時に道楽をおさへた人々にみるやうに、――母にいはせれば、政治熱も「道楽」である、――この喜之進の場合には、歳を取るに従つて、ますます妙な熱つぽさが加はるやうであつた。それを母たちは心配してゐるのである。彼が年来帰依してゐる志学丈夫先生とはなにものであるか。一人の、民党的な政治学者であり、憲政のために一生を捧げつくした志士であるとしても、今日の彼は、その「自由主義的思想」によつて、世の中から指弾され、退却してしまつてゐる人である。いつかの議会の演説、外遊中の演説などのために、身辺までが気づかはれて、護衛があるといふほどの人である。

母は、為吉が学校で哲学といふやうな、政治とは縁のないことをするやうになつたことを、普通の親たちのやうには悲しまないで、むしろ喜んだほどであつた。きはめてつつましい暮しが立つほどの身で、安穏に生きることの方が、よほどよろしいと思つてゐた。それほどに、母の政治への反撥心は強かつたのだから、学校を出た息子が、喜之進叔父の紹介で、永く志学氏が総長をしてゐた某私立大学に勤めるやうになつたことについても、感謝しながらも心配し、それから、叔父が為吉の多少の文才、――といふよりも多大の暇に眼をつけて、志学氏の伝記を綴れとすすめ、さういふことによつて為吉が志学氏に触れる折が多くなつて行つたことには、明かに不満の色をしめしてゐた。それはいはれのない心配です、と、為吉は、出来ることならば母に説明したかつたが、なかなかうまく納得できるやうに云へるものでもなかつた。

妻の場合はどうであつたか。昨日、母に話した後、買物からかへつてきた妻が子供を抱いて二階に上つてきたとき、「明日、山にゆくのだが」といふと、やはり消極的な返事しかしなかつた。妻は、喜之進叔父が、「亡き政友の遺子」として為吉の一家に紹介し媒妁したのであるが、この場合は、母のやうに「政治」を恐れてゐるといふよりは、ほかのことであつた。「一緒に、二三日、山にあそびに行つてみないか」と、お座なりでなくすすめたのだけれども、「だめ、だめ」と首を振つた。「母さんに悪いぢやないの」とはじめにいつた。さういふことは絶対に気にするものではない、母もかへつて喜んで送り出してくれるだらう、と、彼はいつた。「さうねえ」と妻は、自分の体と、抱いてゐた三つの女の子の体とのまはりに、すうツと撫でるやうな眼付きを走らせた。それで妻がなにを表現しようとしてゐるかは、もう分るのであつた。そんな、服装のことなどはどうでもいいではないか、有りのままの恰好で、肩を張つて軽井沢だらうがどこだらうが歩きまはれば、その方がいくら立派だか分らぬ、——といふ意味合ひのことを為吉はいつたのだが、このときは、母のことの場合ほど歯切れよくはいへなかつた。「でも——」と妻は、子供がすこし腹をこはしてゐることを、こんどはいひ出した。「それこそ、二、三日、涼しいとこにゆけば元気が出るんだが」といつたが、やはり、行かうともいはなかつた。

さうした、いはゆる瑣末なことになればなるほど、始末は一層むつかしいものだ、といふことは、為吉にも分つてゐた。議論してみてもどうにもなることでなく、こまかくこまかく縺れた糸先のやうなもので、ほぐれることはない。「それでは、俺が一人で行つてくるよ」といふほかなかつた。そのときに、志学氏の、美しくなくはない二人の娘のことでも、なにはなしに、妻は心に浮べてゐるのであらうか、と、ふと為吉の心にさういふことが閃めいたが、それはすぐに心から追ひ出してしまつた。

「やあ、よく来た」

手拭を肩にかけた浴衣姿で、夜の帳場で煙草を買つてゐた叔父が、乗合自動車から降りた為吉をみつけると、大きな声をかけた。

「なかなか、寒いほどだわい。部屋に帰つて、火鉢でももらひたいほどだわい」と、いひながら、為吉を、二階の奥の部屋に連れた。

「さあ、着かへなさい。うちはみな元気か。いや、そんな話はあとにして、一風呂浴びてこい。すぐにも、先生のところに行かねばならぬ」

叔父の、日に焼けた、頑丈な体と顔をみてゐると、為吉

はいつも、なにか落着いた頼母しい心持になる。ふだんは口数もまつたく少いのだが、今日は、崇拝し敬愛する志学先生に逢ふのだとおもへば、叔父の心はおのづからはづんでゐるのであらう。

湯から出ると、もはや叔父は、黒い洋服に着かへてゐるところで、為吉に、ワイシャツの首のボタンをはめさせながら「久し振りぢやよ、洋服なぞ着るのは。——昼頃この宿について、すぐにちよつと山荘に伺つたところが、今日はホテルでの晩餐といふことだつた。先生はハイカラだからな。そんなことだらうが、と、洋服は持つてきたんだが、なかなか着にくいわい」といつた。

宿にたのんだ車を待つ間と、それから、小半里も離れた山の中腹にあるホテルに向ふ車のなかで、為吉は手短かに母や妻子の近況をはなした。叔父も、——家業をつぐかたはら近い市の銀行につとめてゐる長男、市の砂糖屋に嫁いでゐる長女、官吏になつて関西に行つてゐる次男のことを、みな無事で元気だとはなし、農業の学校を出ると兵士になつていま支那に行つてゐる三男も、消息はこのごろないが、元気なはずだ、といつた。

「でも、よく出てこられましたね」と為吉は話をかへた。

「うん、それは、何といつても俺が生涯を通じて欽慕してゐるのは、志学丈夫先生だからな。木堂、旁堂ほどに名だたる存在には遂になられなかつたが、日本憲政のためになされた功労からいへば、決して決して劣るものでないとおもつてゐるのだ。彼等ほどの世の名声を得られなかつたのも、先生に高隠の士の気節があるからだ。——いや、それに、先生は、つねに損な立場に置かれるやうなことばかりで、存分に翼を伸されるべき風雲に恵まれなかつたんでもあらう。——と、いへばわれわれ先生の足腰となるべきものが不甲斐なかつた、といふことにもなるがな」

「いや、そんなことぢやないとおもひますよ」

雨が降りしぶき、風が出て霧を吹きまくりながら森林をゆるがしてゐた。車は、坂路をあへぎながら、霧の中におぼろげに灯をつけてゐる山腹のホテルに登つていた。

「とにかく、風雲に乗じられたかどうか、といふことより、俺が景慕するのは、その人格ぢやよ。——先生の伝を、政治臭い人間に書かせるよりも、君のやうなことをしてゐるものにやらせようと、『志学会』の連中に説いたのも、先生の、人間としての面をこそ特筆してもらひたかつたからだよ。そうだ、捗つてゐるか」

坂の屈曲（カーブ）で、ぶつかつてきた重い叔父の体重を支へながら、為吉は答へた。

「えゝ、ぼつぼつやつてゐますがね。人間的な偉さを書く、といつても、やはり先生の全生活が政治そのものですから

ね。むつかしいんですよ。面白いだけに難しいんですよ。それに、今の時節では、先生のいままでの仕事のうちで、あまり強調できぬところもありますからね。どうしたらいいでせうか」

「うん。それは俺にも分る。この俺だとて、かならずしも、一から十まで、先生の主義思想に、今日も賛同してゐるといふわけではない。しかし、先生が、一片耿々の志で、一身のことを忘れて、終始渝らず、この日本の為に尽してこられたことを忘れられないのだ。命が危い、といふ目にも逢はれた。『国賊志学』といふ声さへ浴びられた。あるひはまた、政党変遷史のなかで、莫大の利益の誘惑をうけながら、それもしりぞけ通して、今日もみるとほり清貧でをられる、といふこともある。しかも、この先生から、今日に至つて、続々と逃げて行つて『わしは知らぬ』といふやうな顔して、身の安全を保たうとしてゐる奴がある。何とかいつたなう、――ユダか、あれが多いぞ。だから、俺は、必しも先生の御説には今日従ふのでないが、さうなれば意地を通してでも、先生につき随つて歩みたいのだ。御存じかも知れぬが、志学一派といふわけで、国でも気受のよくない方面もあるよ。ほとんど公共のかかはりは遠慮しているやうな有様だ。しかし、俺のこの心は変らんよ」

叔父の言葉が、悲憤の調子を帯びてきたとき、車は、ホテルの玄関についた。「先生に、伝記上で参考になることを、遠慮しずにおききするのだな」叔父が、おのれの感傷をまぎらすやうにいつたとき、ボーイが唐傘をさしかけて扉をあけた。

二　章

「君も来たのか」と、玄関の広間のわきの球突台のところから、いち早く二人をみつけて来たのは、鼠色の服をきた、丈の高い、志学氏の息子の穆（あつし）であつた。「お蔭で、退屈がたすかる。なるべくながく滞在してほしいね」と、穆は、かしこまつて挨拶しようとする喜之進叔父には、あまり眼も呉れないやうにして、為吉に話しかけた。

「ずつとこつちに来てゐるの？　あつちで、奥さんが悪い、といふことだつたが。その後はどうなの？」

「まあ、掛けたまへ。女房はよくも悪くもならん。僕はちよつと来てみただけだ。東京に用事もあるのでね」と、穆は、煙草を出してすすめながら、椅子に為吉を坐らせた。

穆は為吉と学校が一年ちがひで、そのころから知つてゐたのだが、学校を出ると、その生物学の研究のために三年ほどドイツの大学にゆき、帰つてきてしばらくすると、関西のある大学に勤めるやうになつた。そのあひだ、たびた

び逢つてはゐるが、今度はもう一年振りほどであつた。為吉が穆と近況を話してゐるとき、叔父は、やはり志学氏の誕辰のために来たらしい、年輩紳士と、すこし離れたところで話してゐた。

「やあ、お互に逢ふのは、例の神戸の波止場以来のことですな」

「おう、さうぢやつた」

といふやうな声が大きくきこえた。神戸の波止場といふのは、三年前に、志学氏が外国から帰つてくるのを迎へたとき、といふ意味であつたらう。外国で、国際主義的な演説をしたといふ噂が、すでに日本に伝はつてゐて、その帰朝には非常な危険があるといはれてゐた。事実、ヨーロッパから、研究を終つた息子の穆と一緒にかへつてきた志学氏は、ちやうど暴風雨がさわいでゐる波止場に、「国賊志学」「売国奴を斃せ」などの字を書いた幟が、風雨の中にはためいてゐるのをみたまま、上陸の予定をかへて、横浜までそのままの船で来なければならなかつた。その神戸の港に、四面楚歌の志学氏を迎へに行つたものといへば、彼の信者のなかでも、きはめて少数の、篤志家であつた、といふことをあらはしてゐるわけであり、今、叔父とその紳士とがその事を語りあつたのも、一言にして互の志学氏に対する誠実をみとめあつたといふことになるのである。

まもなく二人は、愉快と満足とをそこに感じたらしく、肩を並べるやうにして、階上の一室を借りて休憩してゐるといふ志学氏を見舞に行つた。穆もその高らかな、「神戸云云」の対話をきいたのであらうが、それがちらと彼に重苦しい追憶をよびさましたらしかつた。むしろ皮肉な色を浮べて、階段をのぼつてゆく二人の後姿を見送つてゐたが、「君、球でもやらないか」と立たうとした。為吉はあまり気がむかぬといふやうな返事をした。

球突台では、穆の末の妹の桜が、首のつまつた紅いスウェタをきて、いかにもこのやうな避暑地の裕福な青年の典型といふやうな容貌、服装、態度をした青年と、しきりに球をついてゐた。桜はさつき為吉と叔父とが入つてきたときから、そのことに気づいてゐたのは明かだつたが、まつたく素知らぬ様子をしながら、その青年と遊んでゐた。挨拶するのが面倒臭い、といふのでもなく、ましてはにかんだといふのでもない。時々こちらを見る眼は涼しいものである。ただ、あなた方には何の関心もないのだ、といふ態度だ。それも、このやうな処にゐる若い人たちに通有な風俗であつた。

「あれは、球だけはうまいよ。熊谷つていふんだ。砂糖会社だつけかな、それとも製粉会社だつけかな、とにかくさういふものの息子さ。外交官の試験を受けてゐるんだが、

何度やつても、この方は球のやうには行かぬらしい。母親とこのホテルにきてゐるんだがね。勉強もしてゐるつもりなんだらう」穆はさう説明した。

「熊谷といへば、先生の友人だつたな。先生の第二回目の洋行のときの……」

「さうさう、君はおやぢの伝記を作つてゐるんだつたね。あれは、桂内閣倒壊の時だつたかな。とにかく、その熊谷がパトロンになつて、やりすぎて行場に困つた親父が外国に行つたんだね」

そのときに、ボーイが、二階の小食堂に晩餐が出来たと知らせにきた。立ちぎはに、穆は、帳場のあたりにゐた黒服の男をちよつと指差して、あれが父の護衛の官憲さ、とささやいた。

長方形の食卓の上には、赤い山百合、紫の桔梗と松虫草、黄色の萱草と女郎花、紫紅の浅間蘭などの山の草花が、雨にぬれて露を含んだまま、清らかにかがやいてゐた。姉娘の泉の肩に手をのせて、レウマチスの患の後の、不自由に強張つた体を、重い足取で運びながら、志学氏が入つてきて、主人の席に坐ると、「いい草花だね」といつて、白い口髭の下で微笑をみせた。歳の割にゆたかに残つてゐる頭髪は、見ちがへるほど白色になつてしまつてゐたが、やはり昔のやうに光沢のいい顔の、秀でた鼻や大きくかがやく眼や、黒い服につつまれた痩軀の、端正な姿勢をみると、まだ志学氏は老いてはゐなかつた。いい花だ、といつた言葉のひびきにしても、一種の雄弁家として名声のあつた彼の面影をたしかにとどめてゐると感じられた。

「ああ、先生はお若い。お元気や」と、さつき叔父と話してゐた紳士が、高らかな声をあげて独語した。この人は、大阪から出てきた四海といふ人だつた。

食卓の一端に志学氏が坐り、反対の一端に泉が坐つた。志学氏の両傍に、馬橋喜之進と、四海とが坐つた。この二人が遠くから出てきた、もつとも感心すべき客であつたのだ。叔父の隣には、昔志学氏に世話になつたことがあるといふ、支那から帰つた紳士が、偶然に訪ねてきたので、この席に列なつてゐた。事変のはじめに、北京で避難籠城したといふことだつた。その隣に、やはり偶然このホテルにきてゐたといふ熊谷夫人、その隣にその息子の、さつき球を突いてゐた青年が坐つた。こちらの側の、四海氏の次に馬橋為吉の席があり、それから順に、穆、桜、と並び、桜はちやうど青年と向きあつて、しきりに大きい黒い瞳をうごかしてゐるのを、為吉は花越しに斜に見た。ともすればその桜が顔を突き出すかげになるところに、白い服をきてゐる泉の顔や姿が、もはや娘といふよりは、若い夫人といふやうに落着いてゐるのも、為吉はみた。はじめて喜之進

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo